

会 議 録

会議の名称	多摩六都科学館基本計画策定委員会
開催日時	平成 25 年 10 月 3 日（木）午後 14 時 00 分から午後 17 時 00 分まで
開催場所	多摩六都科学館 201 会議室
出席者	<p>（委員） 縣秀彦委員、玉村雅敏委員、小川義和委員、福本志濃夫委員、高橋真理子委員（Skype による会議参加）</p> <p>（事務局） 坂口事務局長、神田管理課長、豊田主査、内海主任、小菊主任、寺島</p> <p>（指定管理者） 高柳館長、廣澤統括マネージャー、高橋リーダー、伊藤リーダー、角田リーダー、雨森チーフ、石山チーフ、原チーフ、藤江</p> <p>（ボランティア会） 伊藤、糸井、永原、近藤</p> <p>（基本計画策定業務受託者） 有限会社プランニング・ラボ 村井良子代表</p>
議 事	<p>1 開会</p> <p>2 議題 （1） 会議録の確認 （2） 市民調査結果の報告 （3） 基本計画方針案のための協議（ワークショップ形式で進行） ・ 協議のための情報提供 ・ 多摩六都科学館のめざすべき方向性 協議 ・ 中長期計画のあり方 協議 等</p> <p>（4） その他</p> <p>3 閉会</p>
会議資料	<p>資料1 会議録</p> <p>資料2 多摩六都科学館基本計画策定改訂版</p> <p>資料3 市民調査結果報告</p> <p>資料4 基本計画方針案に関する協議事項および協議のための参考資料</p>
会議内容	<p><input type="checkbox"/> 全文記録</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録</p> <p><input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録</p>
発言者名	<p>発言内容</p> <p>（別紙 多摩六都科学館基本計画策定委員会第3回会議 議事録本文）</p>

会議内容

1. 開会

○委員長：

本日はワークショップ形式で3つのグループに分かれて議論する時間を設ける。委員会の時間は2時間の予定であるが延長する可能性があることをご了承いただきたい。

2. 議題(1)会議録の確認

○委員長：

会議録の確認についてだが、資料1が前回第2回の議事録になっている。委員の方にはメールで一度確認していただいていると思うが、気づいた点等あれば、本日終わりまでに修正点を教えて欲しい。

○事務局：

最後に配ったナンバーのない「多摩六都科学館 第2次基本計画策定委員会について」という資料をご覧ください。この委員会は「非公開」ということで特にホームページで案内をしていなかったが、今後、議会への報告やパブリックコメントをしていくことを想定し、ホームページの中で、基本計画策定をどのようにやっているかというお知らせをしていきたいと思っている。今日配ったものはその案であり、このような内容で委員会の情報を公開していくつもりである。この件について委員の皆様のご意見・ご了承をいただきたい。

まず1番目は委員会についてということで、添付ファイル1にはスケジュールと委員の構成を掲載する。委員会の名簿については既に委員の皆様にご了承いただいているものであるが、何か所属等変更があれば教えて欲しい。

このような形で公開することについて何か意見はあるか。

○委員長：

今の事務局からの話でよいか。

○委員：

一同異論なし。公開決定とする。

○事務局：

続いて資料2をご覧ください。今のWEBでの公開のところにもあったが、今後のスケジュールについて説明する。まず本日の委員会の後に、計画案のとりまとめを行い、10月29日にある議会への報告を大きな目標とする。ここでは中間案ということで中間報告をすることになる。その前座として10月18日の組合理事会は、構成5市の市長の会議であるため、ここでも同様のものを出すことになる。その後は中間案をパブリックコメントで市民意見公募を行い、また、市民意見交換会ということで市民からのご意見を直接聞く機会も設けていきたいと思っている。その間に調査活動として、インターネットの調査、あるいはグループインタビューを予定している。最終的に12月の第4回委員会で計画案の最終調整を行い、1月に組合管理者—西東京市長に答申という形で報告をする。従って計画案については年内いっぱいまで終えたいと思っている。その後はこの計画案の承認・報告ということになるが、1月30日に組合理事会へ報告し、2月12日に組合議会へ報告をする。組合議会は構成5市から2人ずつ、合計10人の議員で構成されている。こちらが終わると議員がそれぞれの市に帰って報告をするので結果的に5市の議会にもこれで情報が伝わるということになる。3月にはホームページで公開していきたいと考えている。

何か質問等あればお願いしたい。

○委員長：

スケジュールについて事務局から説明があったが、これでよいか。

○委員：
異論・質問なし。

(2)市民調査結果の報告

○委員長：
では、市民調査結果の報告に移ることにする。受託者から説明していただきたい。

○受託者：
市民調査の報告は今回資料3として用意したものになる。クロス集計は終了しているが、これを皆に渡すと相当の量になってしまうので、今回は用意をしていない。こちらはすぐに皆に送る予定である。データはパソコンの中に入っているもので、今日の協議の中で必要と思われるものがあれば言って欲しい。

クロス集計としては、館内の利用者は休日と平日ではかなり利用者層が違うので、その点を集計し分析を行った。年代・住所・利用度・圏域市民においては自治体・居住歴（旧住民・新住民・新々住民）によってどのような違いが見られるかを分析している。児童の場合も同様に年齢と利用度・自治体でクロス集計をしている。今回はここまでにして、協議を優先したいと思う。

○委員長：
今回はクロス集計をしてある、ということだけでいいのか

○受託者：
本日は、調査の結果報告をするとそれだけで相当長い時間を要してしまうので、ここまでにし、協議に注力したい。

○委員長：
時間の配分もあり、進行上本日はここまでにしておきたい。

(3)基本計画方針案の協議（ワークショップ形式で進行）

○委員長：
続いて基本計画方針案の協議に入る。ワークショップの進め方や前もって必要な情報等について説明をしてもらいたい。

○受託者：
これから協議のための情報提供・多摩六都科学館のめざすべき方向性について10分程度で説明したい。ワークショップ実施にあたり、すでに3つのチームにグループ分けをさせてもらったので、机を並べ替えて席を作って欲しい。グループ分けはそれぞれのチームにファシリテーターを置き、実施したい。

資料4の6頁に多摩六都広域連携プラン（H23～27）の中期計画がある。この中で多摩六都科学館の位置づけがされている。東京都の色々な計画を調べてみたところ、特に多摩六都科学館の名前をあげて役割を明記してあるものがなかったので、「多摩六都科学館はこういう役割を担っていける」等、提案型でまとめていくのが良いのではないかと思う。多摩六都広域連携プランでは、将来像は「みどりと生活の共存圏」、政策目標の柱のふたつ目「だれもが生き生きと健やかに暮らせる地域の創造」の中の「知性と感性を豊かに育む多摩六都」で多摩六都科学館が大きな役割を担うことを期待されている。

7頁目にはその概要が書かれている。現状と課題のところには設置目的が書かれており、めざすべき方向性では、「多摩六都科学館に対する圏域住民の期待、要望への対応ということで、全国唯一の広域行政による科学館であり、今後も圏域の中心的な施設として運営して科学に触れる機会を積極的に作り出し、知識・情報を育む総合的な学習活動を行えるよう支援していく」ということが書かれている。事業展開としては、多摩六都科学館の魅力向上、地域連携の促進、民間活力の導入ということで、平成25年の時点では、24年までに終了しているものもあるので、今後は地域連携の促進という点が期待されている。以前の広域連携プランでは生涯学習施設としての役割を担うことが期待されていたが、現プランでは、この後の多摩六都の魅力を発信するという項目で地域資源のひ

とつとして、また普及促進をしていく場として、盛り上げていくことが求められていることがわかる。

これが、行政サイドからの科学館への期待・求められている社会的な価値・役割となる。組織的な価値・役割は、皆さんが前回の戦略計画のワークショップで整理した使命や戦略を材料として使うことができる。個人的な価値は、市民調査の中から読み取ればよいと思う。

本日はこのような状況を把握した上で、方向性を2つの観点から皆で議論したい。1頁目の「多摩六都科学館における「科学」の定義」、「当館でどのような体験をしてほしいのか」「学習・体験のゴール」「誰のために（ターゲット・エリア設定）」を方向性の①として、まず議論してほしい。次に、2頁、3頁の調査結果の現状値として10年間の実績の結果としてはこのようになっているが、どの役割を実施し、成長させたいのか、あるいは別の方向性でいくのかということも議論してほしい。この現状値に対してこれから10年間の目標値はどのくらいに定めていけばいいのか、また定めた目標値が年度ごとにどのくらいのロードマップを踏んで達成していったらいいのかということもイメージしつつ目標設定をしてほしい。

3頁目は市民調査の結果としてこれから10年間どのような科学館像をめざすべきかということでも出た結果である。左側の2つは高い数値であるが果たしてこれらを伸ばしていくべきなのか、他のことに力を入れていくべきなのかということも考えつつ、目標値を定めてほしい。

4頁・5頁は前回の委員会の時に調査結果や分析結果を素案としてまとめたものになる。ひとつの考え方として見てもらえればと思う。

9頁の第2次基本計画は、戦略計画方式で策定するので、本日可能であれば改めて使命・中長期目標・戦略目標までは議論ができると考えている。事業計画・業績指標は今後検討をしていく。大きな目標、大きな方向性を今日は皆で協議し、決めてしまいたい。

10頁は大きな目標が定まったところで、10年間どのようなロードマップで進めていくかを検討して欲しい。本日はここまで全ては終わらないかもしれないが、ここまでは基本計画ではまとめた。

そのあと、各グループで発表してもらいたい。まとめ方としては付箋と模造紙を用意してあるので、まずは1頁目の項目を皆で考えて該当するスペースに貼っていき、ファシリテーターの方に進行役をしてもらい皆で議論して行ってほしい。

○委員長：

質問や進め方に対する提案等があれば、お願いしたい。25名の方がこの後3つのグループに分かれてAチームが隣の部屋、Bチームが部屋の前の方、Cチームが部屋の後方を使って協議をしてほしい。

以下、各チームに分かれて議論。

基本計画方針の協議・各チームの発表

・Aチーム

○発表者：

「今年までの10年間のミッションステートメントについて1回目の会議で配られた「多摩六都科学館基本計画」を皆で読み合わせをした。結果的にはミッションステートメントについては議論に至らなかったが、基本的なことでは気が付いたことがあった。1つにはミッションステートメントが5つあるが、長すぎるという点である。ミッションステートメントは職員が空で言えるようなものであるべきではないのか。そのほうがお互い共有・共感しやすいのではないかと思う。従って今回は短くしましょうということになった。

5つのミッションステートメントのうちの「エンjoyメントと科学の専門性を両立する」というのがあるが、次の計画でこれが重要になるとメンバー8人で合意した。

2つ目に、「文化としての科学に触れる機会を積極的に作り出す」ということに対しては、前回の会議でも「文化としての科学」という言葉が分かりにくいという意見があったとおり、文化という言葉も科学という言葉も人によってイメージするものが違うので、このような曖昧なものを2つ連ねると訳がわからなくなる。従ってよりわかりやすい表現にするべきではないかということになった。科学技術立国として科学技術力のために科学技術者を育てるためではなく、星や昆虫を見て胸

がときめいた経験を大人になっても子ども達と一緒に共有できるような科学を目指したい。

3つ目は「地域の人たちが集まり、世代を超えて交流や自主的な活動をできるようにお手伝いする」ということだが、これが不十分であり、後になりに議論することになった。

4つ目は、「人間と科学の調和を目指す」ということがあり、人間と科学の調和とは何であろう、意味がわからない。人間が科学を創り出したのだから、人間があって科学を活用しているわけであり、調和するのはおかしいのではないかと、あり得ないのではないかと、半分の人は人間中心説で、残りの半分の人たちはそうではない、ということで大激論になった。

5つ目の「お客さまを第一に考え、お客さまに質の高い満足をしてもらう」ということに対しては特に異論は無かった。従って、この5つのミッションが非常に大きく変わるような理念ではないし、継続すべきものではあるが、全体的にわかりやすく簡素にすべきであろうということでまとまった。

ミッションステートメントとは直接関係のないところだが、前回も議論した「館長を呼ぼう」「館の名前を変えよう」「学芸員を雇用しよう」という大きな3つの提案が10年前にあった訳だが、館長は素晴らしい方が来て下さったものの、名前が未だに「多摩六都科学館」のまま変わっていない。このままの名前で行くのか、変えるのかということはしっかり議論して計画に盛り込むべきであろう。というのは、多摩六都科学館は地域のための科学館である一方、このミッションステートメントには一切地域性がない。新しいミッションステートメントには必ず地域のことを一この地域になぜ必要なのか、地域に対してのニーズは何かということがひとことでわかるようなことを入れて欲しい。また・多摩六都はできたときから子ども向けの科学館というイメージがとても強いのでこのイメージを払拭することが必要ではないか。この少子高齢化の中で今、地域の中ではニューファミリーの居住が増えている。ターゲットは親子やシニア層で、シニア層は平日に企画をし、中高大学生が殆ど来ていないので、サイエンスカフェを開催するなど、一度は来てもらうように工夫をすべきである。地域が主であるものの世代別に戦略を計画しないと、子ども向けのイメージから脱却できない。その時に名前を変えることが必要であれば、その点も含めて検討すべきであろう。

地域については多く議論したのだが、多摩という地域性が今のままでは感じられない。武蔵野台地という自然と工業・技術・産業との接点、それにアプローチできる立地のよさ、圏域内に多くの大学研究施設がある点等を地域性として謳えるのではないかと。地に足がついた、ローカルな科学館にふさわしいミッションステートメントを創るべきである。雑木林・地域の科学技術・大学研究等のこれらの特質を謳っていき、連携していくことが、顧客・地域の人たちの満足度を上げることにつながると思われる。

改善点としては、カフェを変える、バスが必要、広報をもう少し戦略的に大人向けにし、3世代が楽しめる科学館にするということ、指定管理者制度になり、ラボやDo Science!という方向性がしっかり確立されてきたのでこの点をいかに伸ばし、説明ができるようにしていくかということが挙げられた。

・B チーム

○発表者：

まず科学の定義だが、

- ・実体験を基にして論理的に整理して「言葉」にしていく
- ・自然—宇宙と人間の関係を探る行為、すべてが含まれる。

という、わりと人文科学を含め、広くやっていくということが話し合われた。

また、どんな体験をしてほしいかというところでは、色々挙げたのだが、基本的にはものごとのつながりに気づくことができるような体験をしてほしい、また年齢が高い世代の人々はつながりに気が付くことができるが、小さな子たちは年齢が上がっていったときに気づききっかけとなる印象をしっかりと植えつけるような体験ができる場所にしたいという意見が挙げられた。

多摩六都科学館の目的というところでは、

- ・生きる力となる体験が得られる場所
- ・学び体験の場所
- ・人づくりの場所

ということで、人のつながりを大事にした科学館でありたいという話になった。それにより科学が学ぶ力や生きる力にもつながってくると思う。地域にも還元できるようになってくる。

当館で行う「科学の領域」については

- ・身近なものをターゲットにした領域を作っていく
 - ・今まで科学と思われていた部分だけでなく他の分野にも踏み込んだようなものも取り入れる。
- という意見でまとまった。

目標（学習・体験のゴール）に関しては、目的や体験につながってしまって、具体的などころまで意見をまとめることができなかつたが、

- ・自分と周りの世界についての関係をきっちり興味を持って、それを探っていけるような人を育むような場所としての体験をゴールにしていったらどうか
- ・学校カリキュラムで体験できないものをやる
- ・上野まで行かなくても身近に利用できる施設が必要

という意見が出ていた。

持ち帰って欲しいメッセージは

- ・日常生活にも科学はあるということを知ってほしい
- ・やはり科学はおもしろい
- ・**Do Science!** 自分が科学していく、じっくりその場で見て考えていく。
- ・科学することは楽しい！豊かな生活にもつながる

等が挙げた。

ターゲットは、意見が分かれてしまったが、皆が共感できたものの中には「自分のために」というものがあった。自分が楽しんでこそ、人に楽しみを伝えられるという意味である。ただ高齢者・小学生・中学生や色々な人をターゲットにしたいという話にもなった。

あと、井の頭動物園的一年とともに見えてくるものが変わるというものがあったが、これは動物園であるが、多摩や上野と違いこぢんまりとした井の頭動物園というのは、ふらっと寄ったり日常の延長で通い続けることができる施設であり、続けて通うことで子どものときに見ていたものが違う見方ができるようになる場所だと思う。科学館の非日常性も確かに売りではあると思うが、同時に日常の延長としての感覚で利用してもらいたい、という意味である。

あとは、同時にアンケートやデータをもとに、戦略的にどこを狙っていくかというのも重要であるという意見も出ていた。

役割とどの点を重要視して成長させていくか、というところでも人やコミュニティという居場所としての価値といったものが重要ではないかという意見と、地域性をどう捉えるかというところをしっかりと分析していかなければならない一方で地域性だけだと狭くなったり、来る前に先入観でおもしろくないとシャットアウトされる可能性もあると思うので、グローバルなことも並行してやりながら地域性に当てはめていく等のやり方を工夫しなければ成長性に発展していけないのではないかという声もあった。多摩地域からみた日本の科学という見方でやっていくのもよいのではないか。狭いところから広いところをみていくやり方もあるのではないか。

どんな科学館像を目指していくのか、というところでは、地域性を大事にしながら、今までやってきた **Do Science!** というものの質の向上をはかり、住民参加を促すようなしくみを作っていくことが重要。はこものを貸し出すプラネタリウム等の話であるが、一般にも貸し出しができたらいいのでは、という連携のやり方も挙げた。だいたいの話はこのような感じであるが補足をしてもらいたい。

○発表者：

右側のほうは、資料で分析結果が出ているので2頁めの実績評価で、調査2の館内利用者と調査5の地域住民の意見を見ると、Do Science!は実績が上がってきている、ミッションでは科学の分野に関しては理解されているというのがわかる。一方、地域というところは、なかなか来た人にわかってもらえていない。Aチームと同様であるが、サイエンスの部分、サイエンスとエンジョイメントの両立を充実させながら、地域性をどうだしていくかが大きな課題である。例えば科学というものは汎用性が高いので地域性が出にくい、地域にこだわった科学というものを何らかの形で出していればこの館の独自のものになっていくのではないかと。これが次の方向性になってくるのではないかと。

・Cチーム

○発表者：

まずこの6つの項目について皆で書き出し、説明をしてもらおうと試みたが、個別には語れなかった。全部関連性があり、それぞれにストーリーがあったためである。まず、一つずつ説明をしてもらいたい。

○発表者：

私は地方の科学館としていわゆる技術立国日本を支える人財の育成と底上げが一番の科学館の目的ではないかと思う。科学と言うのは自然科学であり物理・科学・地学・生物学、大学で言えば理学部の分野であると考えている。底上げということを考えれば対象は小学生になり、子ども達にいかにか理科が面白いかを体験や驚きをもって伝える所が科学館であると思っている。この資料をみて、科学という面では良いところにまで持っていけているので、そのほかの部分を上げていくというやり方もあるかもしれないが、科学の部分をもっと消化して上げていくというのもよいのではないかと。

○発言者：

ベースの部分は前の発言者とほぼ同じであるが、今までの10年間と今後の10年間ということを考えて、よりクリアな運営を目指していくことが必要であると思う。地域一圏域5市の負担金で成り立っている施設であるので、今後10年間においてはこの点に重点を置いて運営をしていくことが望ましいのではないかと。具体的には、今現在、地域連携やマーケティングという言葉はたくさん出てくるもののなかなか進んでいないような印象を受ける。児童館や他の教育施設で、ここでやっているプログラムがすでにされていることもあるので科学館としての看板を背負っている以上、よりほかの施設との差別化をはかれるようなプログラム展開をしていきたい。さらに他機関の指導者から頼りにされるような施設をめざしたい。

○発言者：

いろいろ意見があったが基本的には科学の定義や領域に関しては、比較的基礎科学に特化して考えていきたいというタイプの人と、もう少し日常的な観点から考え、科学的なアプローチの仕方が重要であってテーマにはそれほどこだわらないタイプの人に分かれた。従ってまとめることはしなかった。

さらに体験のゴールに関しては、それほど大きな違いは出てこなかった。

- ・新しい発見や知識が得られる科学館であり続けることや、わくわくしたり不思議が膨らむような場所
 - ・日常から活用できる科学館であること
 - ・一歩上をいく、別のアプローチが体験できる、多摩地区における科学的センターとしての役割（人づくり・プログラム・プロダクトの普及）
 - ・非日常的な体験ができるだけでなくもっと身近に感じられる科学館
- 等をめざしていきたいという意見が挙がった。キーワードとしては「人づくり」と「センターとしての役割」であり、他の機関ではできない少し上の機能を持たせていきたい。

本日ネットで参加してくださっている委員からは、「日常の中にある科学を中心に人々の知りたいという果実としての科学」「人の営みとしての科学（最先端のものも含む）」という科学の定義、

どのような体験かという「好奇心を引き出す、想像力を広げる、創造力に繋がるような体験」「双方向であることがとても大切」という意見を頂いている。

私は今回のワークショップをやってみて思ったのは、2頁・3頁の資料は作ったものの委員長が先に述べていた通り、ミッションを改めるとそこがひっくり返ってしまう。従って資料にあるデータを現状値としてとどめ、引っ張りすぎではいけないと思った。ミッションや目指すべき方向性を見定めたいので改めて実績資料を定めればよく、資料にこだわりすぎずにまとめていったほうが良いように思った。なぜならコミュニティの概念や、文系・理系という概念も30年、100年経てば変わってしまう可能性があるからである。そうであるとすれば、領域にあまりとらわれすぎず、やっていった方がよいのではないか、という意見が出ていた。今までの基本計画や調査結果にこだわりすぎない少し上の目標を立て、それをめざしていくような第2次基本計画にしたい。

○委員長：

長い時間お疲れ様でした。この後、どうまとめていったら良いと思うか。

○受託者：

私がたたき台を作るので、専門部会という形で細かい議論をしてまとめていくようなプロセスをとってはどうか。そこである程度まとまったところで委員会を開催してはどうか。

○委員長：

今日、意見分布をとっておかなければいけないことはあるか。

○受託者：

今日の意見でこの路線はおかしい等、ご意見はないか。

○委員：

過去と現在と未来を軸にしていくべきではないか。過去に引きずられる必要はないので、過去は過去としてきちんと過去のミッションはこうであった、と整理しておくべきである。逆に将来は、10年後、20年後に社会がこうなると社会を予想して作っていく逆ミッションになると思う。この意見を過去と現在と未来にまとめなおすとまとまりそうな気がする。また、対立する概念がいくつかあるが、今対立している概念であり、20年後にはもしかしたら共有できる概念かも知れない。新しい価値かもしれないので、その部分を見定めると新しいミッションに活かせる可能性があるのではないか。

○受託者：

キーワードとして地域とかターゲットとか科学等、明確にしていくべきものもある。これらをきちんと整理しくとまとまっていけるのではないかと思う。

○委員長：

整理をすると、対立する部分があって、今は両論を併記しておかざるを得ないが今は中間なので見えてきた詰めるべき部分を詰めていけばよいと思う。ただまとめるにあたり、今のミッションステートメントを踏襲するのか、そうではないのかという点に気になるところがある。それは、地域の人たちが集まって世代を超えて交流をし、自主的な活動をして成長をする場所としてどう機能するかというところの議論があまり深まっていないと思う。この点をもっと深く議論していくべきであり、今までは科学館に来て下さるお客さまをどう満足させるかという文脈であったが、逆に今は地域に出ていくとか、地域とのコラボレーションをする等連携をしていくことがキーワードになっている。これは5年前、10年前に作ったミッションステートメントとは明らかに違う点である。

メインターゲットにばかり議論が集中しているところがあったが、前回の会議でターゲットは主たるターゲットはここに住んでいる人たちだということにしたのでそれはいいのだが、マイノリティの人々（外国人・ハンディキャップがある人）に対する対応を全体の枠組みの中でどの位人や費用をかけるかということはある程度は謳わないといけないのではないか。この辺りに対して何か館のイメージするものはあるか。5年後10年後、ここに来てくれる方を迎えることに注力するのか、

自分たちが積極的に外に出ていくのか。

○事務局：

経費など諸問題もあるので、ある程度ここで練っておいてから指定管理者との具体的な計画に落とさないといけないと思う。基本計画の議論に期待するところが大きい。

○受託者：

第1次基本計画のときも財政計画を作ったが、ハードの部分についてのものが多かった。今後は財政計画もセグメント別にプログラムを開発するなど、ソフトの部分に対してどのようにお金を捻出していか考える必要があると思う。

○委員長：

まだ議論しなくてはいけないことが沢山あるが、決まったスケジュールは動かさないで、今日までの議論を受けて考えるべきことは沢山出たので、中間のまとめをしていただいでこちらを確認したあと、パブリックコメントや色々な方々の意見を受けて次の段階で詰めていく。12月までにもう一回ずつ専門部会と委員会を開催するという事でよいか。

○委員長：

ここで異論がなければ本日の委員会はここまでにする。その他何かあるか。

(4)その他

○委員：

ご案内だが、杉長さんという博物館学を研究している方が分析をした記事である。報告書はおそらくホームページで閲覧できる。1960年代以前に開館した博物館の入館者が増えているということである。ソフトパワーが充実しているといずれ基礎体力がついてきて入館者が増えるということを行っている。一方で1970年から90年代に開館した博物館は建物を建てた後、なかなかソフトパワーが充実させられなかったため入館者が減っているのがデータとして出てきている。先ほど財政計画の話があったが是非学芸員の数を増やす等、折角よいミッションを作ってもなかなか到達できないので、きちんとこのようなところも充実させていってほしい。

○委員：

多摩六都科学館の体質やソフトパワー等の面を成長させ、かつ今後10年間でより充実させていってほしい。多摩六都は地域の生活の中にあって人々とのつながりの中に存在する科学館になっていくと自ずとパワーもついてくると思う。地域の活動が多摩六都のパワーになる。

○委員長：

他に何かあるか。

○事務局：

12月の委員会についてはまた改めてスケジュール表をお送りするので日程調整をしていただきたい。

○受託者：

専門部会はあまり遅くならないうちに10月中か11月の頭くらいに開催したいと思う。この時はあまり大人数でやらずに小規模でやりたいので、出席したい方はご連絡いただきたい。

○委員長：

本日はこれで閉会とする。

3. 閉会